



室生犀星研究 : 詩的散文をめぐって (二〇二五年度 修士論文要旨)

井上, 峻佑

(Citation)

國文論叢別冊, 3:85-86

(Issue Date)

2026-08-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100505572>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100505572>



室生犀星研究

——詩的散文をめぐって——

井上 峻佑

本修士論文は、室生犀星「私の「白い牙」」(一九二九)、「あに
いもうと」・「続あにいもうと」(一九三四)、「かげろふの日記遺
文」(一九五八・九)を論じ、犀星の小説を「詩的散文」と定義づ
けることで、詩と散文の境界を問題化する試みである。口語自由
詩の成立期に詩と小説を並行執筆した犀星は、昭和初期に「詩人
系小説の時代」を宣告すると同時に、詩的精神の小説化がもたら
す功罪に目を向けていた。本論は、各作品の特異な修辞や文体に
着目し、その詩的表現の意義を論証する。

第一章では、「私の「白い牙」」を考察の対象とする。本作は従
来、自伝小説の系譜として論じられてきたが、本論では犀星が自
身の「野獣性」へと回帰する決定的な転換点として再解釈する。
執筆当時の犀星は、萩原朔太郎から「野獣」性を喪失しマンネリ
ズムに陥つているとの批判を受けていた。本作の特異性は、連用
中止法や詩の形式である「行分け」を多用する(立体的手法)に
ある。当時の犀星にとって「行分け」は、詩という形式がもたら
す自己束縛、すなわち「檻」や「鎖」と同義であった。作中、語
り手の「私」は、ブルジョワジーや都市モダニズムへの嫌悪から、
飼育する土佐犬との雑種(土佐ブル)の本能的闘争に自己を投影
する。闘犬の場面において、土佐ブルの「鎖」を解き放ち、その

「比類の無い美しい鮮紅色」の血を目撃するプロセスを経ること
で、小説内から「行分け」という表記が完全に消滅し、散文へと
移行する。この(立体的手法)からの脱却は、対象を散文の中で
捉え直し、自身の中にこそ潜む「惨忍な思想」や「野蠻性」を自
覚する象徴的实践であったと位置づける。

第二章では、「あにいもうと」・「続あにいもうと」(原題「神々の
へど」)の連作小説について論じる。これらは、会話を地の文に混
入させる特異な文体で描かれている。この時期の犀星は、伊藤整
や横光利一の新心理主義が「地の文」に偏重している点や、谷
崎潤一郎が提起した、昭和初年代の書き言葉と話し言葉の乖離、
つまり言文一致体への疑義に言及していた。「あにいもうと」等
で用いた特異な文体を、これらの言説を踏まえた、文学的課題に呼
応する実験であったと位置づける。

「あにいもうと」において、寡黙な父・赤座の感情は多摩川の奔
流と結びついて解放される一方、家庭内における兄・伊之助らの
激しい口論は「へど」のような嘔吐物、すなわち言葉の奔流とし
て地の文に再編される。語り手は、作中人物と俗語的語彙を共有
し、主述を曖昧化させることで、自らの(声)と作中人物の激し
い(声)を不可分な形で縫合した。さらに「続あにいもうと」で
は、赤座の過去が元処刑人であったと書き換えられることで川の
イメージが後退し、代替として「神憑り」のモチーフが導入され
る。これにより、発話主体そのものが多重化し、語り手と作中人
物という主客の境界すらも溶解していく。折口信夫の叙事詩論に
おける「神言(かみごころ)」を補助線とすれば、この主客未分の語
りは「一人称式に発想する叙事詩」への回帰を目指した試みと捉

えられる。発表直後に犀星が「詩よきみとお別れする」と宣言したことは、まさにこの話し言葉と書き言葉の乖離を縫合し、「詩／散文」の形式的境界を解体した結果であると論じる。

第三章では、戦後の王朝小説「かげろふの日記遺文」を主として論じた。本作は従来、作者の女性崇拜の表れや、戦中派批評家による「庶民」表象の観点から評価されてきたが、本論では、戦時下の天皇崇拜から戦後の女人崇拜へと歴史主義をスライドさせた犀星のイデオロギーの場として捉え直す。

犀星は「天皇」（一九五五）で、人間宣言により神聖性を喪失した天皇に対し、「千年のあいだ守り続けられた」という美学的・歴史主義的な観点から擁護を試みた。そして、現実の天皇が人間化したことで行き場を失った絶対的な美の拠り所は、「女人崇拜」へと形を変えることでその歴史主義を延命させた。「かげろふの日記遺文」に登場する冴野やあたらし野の姫が、皇族の血筋として設定されているのは、かつて天皇に向けられていた聖性への眼差しが、女性の肉体へと思想的移譲を遂げた痕跡であることを示す。

物語は、『蜻蛉日記』の筆者であり言葉を「書く女」である紫苑と、修辞を持たずに肉体で「物語る」（＝語り合う）女である町の小路の女（冴野）の対立を軸に展開する。紫苑は「書く」ことで自我を保とうとするが、女性共同体の強い没我性と自己の矜持との間で煩悶する。対して藤原兼家は、紫苑の「書かれた」言葉の固定性を必要なものとして疎み、修辞を持たずすべてを「物語る」冴野の生々しさを肯定する。しかし特筆すべきは、冴野が最終的に絶対的な美の象徴として昇華されるのは、彼女が消失し、その言葉が文字として定着されず「匿される」ことによってであ

る点にある。作中で紫苑が絶賛した冴野の「長歌」が、テキスト上では散文でしか記述されないことは、記録されない言葉こそが多義的な解釈を許容し、実像を離れて美化・絶対化されるという本作の構造を端的に示している。

結論として、本論文は昭和期の室生犀星が「詩と散文」という形式上の境界をいかに問題化してきたかを論じた。「私の「白い牙」における行分けからの解放による散文の獲得、「あにいもうと」における声と地の文の混淆による詩と散文の境界の無化、そして「かげろふの日記遺文」における「修辞」の否定と秘匿化。これらは、主として小説家として活動しつつも、詩というジャンルを常に自身に引きつけて執筆した室生犀星の営為を示すものである。

（いのうえ しゅんすけ）